

技術士の資格を得て、4年になります。その間に、技術士としてこういった仕事ができただのかを振り返ってみて、最も印象に残っているのが日本海ニシン資源増大プロジェクトの成果をまとめて「豊かな海」に掲載して頂いたことです。もちろんプロジェクトの成果は先輩、同僚諸氏によって詳細な報告書、多くの科学論文、報告会のプレゼンテーションなどを通して社会に還元されており、私の広報用の文章はその一端にすぎません。しかし、研究者とは少し違った技術士の視点を意識し、その上で文章を仕上げる作業は技術士とは何かを実感させてくれました。同時進行で、ほぼ同じ内容を研究論文としてまとめていたために、なおさらでした。

その実感を記述するのは難しいのですが、暗黙知を形式知にすることも技術士の業務の一つですので、がんばって箇条書きとして書いてみます。①内容を伝える相手に、過剰な予備知識を期待しない。②正確さを保ちつつ、極力簡略化する。③起承転結、ストーリー、入口と出口をはっきりさせる。など、技術士試験の論文記述、体験論文の作成で得たスキルを自分なりに業務に使用できたと実感した次第です。

道立の研究機関が地方独立行政法人北海道立総合研究機構となって2年半、ますます業務成果の社会への還元とその方法の多様化が求められていると思います。その中で技術士として、がんばっていきたいと考えています。

山口 幹人 (やまぐち もとひと)

●水産部門(漁業及び増養殖)
総合技術監理部門

勤務先

道総研 中央水産試験場
資源管理部



→ 次号は、吉田 英雄さん(水産部門)

生まれも育ちも北海道の私は、大学時代を札幌で過ごした後、約10年間の内地(東京)勤務を経て北海道に戻り、その後、約10年を経過しました。この間、主に、ダムの設計・施工計画検討・施工管理業務に従事してまいりました。

現在は、東日本大震災の災害復旧事業として、北上川水系・鳴瀬川水系河口部の堤防整備・復旧工事のため宮城県石巻市で勤務しております。

2011年3月11日の東日本大震災は、「安全・安心の国づくり」に取り組んできた技術者にとって、多くの課題と教訓を残したものと思います。そして、今もなお、津波被害の爪痕が多く残る河口部に立つと、津波規模の大きさと、現場から学ぶことの多さに痛感します。

土木技術者としてスタートし約20年を経過しましたが、この20年間で、少子高齢化社会へ突入や公共事業費の削減、既存ストックの維持管理時代への移行、大規模地震の発生、局所的豪雨による水害・大規模土砂災害の発生等、土木技術者を取り巻く環境や、自然災害の様相が変化しました。

最近では、このような時代背景、変化の中で、「技術者としてあるべき姿は?」「時代の変化に対応できているのか?」また「時代の変化に振り回されていないか?」と考えています。そして、趣味である珈琲豆の焙煎に没頭し、一杯の珈琲をドリップしながら夜は更けていきます。

杉本 雄一 (すぎもと ゆういち)

●建設部門
(河川、砂防及び海岸・海洋)

勤務先

パシフィックコンサルタンツ株式会社
北海道国土保全事業部



→ 次号は、高橋 亮一さん(建設部門)